

〔能楽〕 研究展望(昭和47年)

片桐, 登

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

132

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

1974-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020246>

研究展望（昭和47年）

はじめに

昭和四十七年の一年間に公刊された、能・狂言関係の単行本・論文、あるいはエッセイなどの数は決して多いとはいえない。数は多くないが、その視点は多角的であった。最も基礎的なテキストの校訂・校注や文献資料の紹介は続けられたし、能楽論研究・作品研究・歴史研究、あるいは現役の長老演者による芸談・芸論もまとめられ、また入門的要素を持つものも公刊されるなど、その分量のわりに多岐にわたる活動が展開されたことになる。

ところで、このような傾向は、実は四十七年に限ったことではなく、ここ数年来のことであった。どの視点が中心になってリードしたというのではなく、これら全視点が平行して進められ（もちろんより進んだ面もあれば、やや立ち遅れた面もある）、相互に関連しあって成果をあげてきた。そうした流れの中で、新しい視点からの研究も徐々に進められるようになり、成果をあげはじめている。例えば、作品研究に限って見てみよう。

その一は、作品の本説を探る時、中世に流布し中世文芸の中でも大きな位置をしめていた伊勢物語や古今和歌集の古注との関係

がたどられるようになったことである。四十年代の初めから、伊藤正義氏を中心に研究がすすめられ、まだそれほど多くの論考となつて結実したわけではないが、いま成果をあげつつある。能の作品を中世文芸史の流れの中でとらえ、位置づけ、さらに古注の享受の様相をたどる上でも、期待される分野である。

その二は、作品研究を通して世阿弥を研究し、世阿弥の能楽論をより深く理解しようとする試みがなされるようになったことである。従来、伝書研究と作品研究とは、わづかに『三道』の本説論や謡曲の構成論などを手がかりにして結びつけていたにすぎないように思われる。いまようやく、『三道』だけでなく、『花伝』『至花道』『花鏡』をはじめとする諸伝書の内容を作品に照らし、作品をまた伝書理解に駆使するという方向にすすみはじめた。ようやく、総合的にとらえようとする、あるべき方法に一步近づいたといえよう。

もう一つ。作品研究に、能の基本的な要素である音楽ないしは舞台上の技法の知識を導入し、それによって分析を試み、作品の特色をえぐり、作者の特徴を探ろうとする方法である。この早い試みは、横道萬里雄氏の岩波古典大系『謡曲集上下』にみられる

が、いま、技法にも強い関心を寄せる研究者が出はじめ、散発的にではあるが、成果があらわれ始めた。なお、この点では実技者との共同研究などが実現すれば、さらに飛躍するものと思われる。右は一端を記したにすぎないし、これらの新しい動向も、数年来のものであることはいうまでもなく、四十七年に特に顕著に見られる傾向でもない。今後はさらに大きな成果が得られ、次の新しい芽を生みだすものとしてふれておきたい。

さて、以下に記す展望も、四十七年の成果のすべてにふれるわけにはゆかない。そこで単行本については、刊行順に概略を紹介することにし、雑誌論文等については、ごく一部分について、その内容を紹介することを主として記すことにした。全く恣意的な選択と記述になっているのは、筆者の力不足である。お詫びしておきたい。なお、文献の詳細目録は、雑誌『観世』に連載中の「能・狂言文献要覧」(小林貴・片桐登編)などによっていただければ幸である。

〔単行本〕(刊行順)

『能に生きる歴史群像』(権藤芳一著、淡文社、二八三頁、二月) 能の主人公として登場する人物四十余名を、修羅無惨・恋慕哀傷・諸行無常・生々流転の四項に分けてとりあげ、その伝記逸話の類(仮作の人物は原典での位置づけなど)を叙述し、能の中でどのように生かされ、活躍させられているかを手際よくまとめている。自分が演じている人物に無頓着な能楽師に、最低この位は知っていてもらい、一般常識として普及・定着させたい、という著

者の目的は達せられ、同時にそのまま能の見どころの説明となっている点で、観客にとっても優れた入門書を得たことになる。

『未刊謡曲集十九・二十』(田中允編。古典文庫、二二四、二二四頁、二・九月) 第一冊発刊以来すでに十年を経て、第二十冊までに通算八七五曲を翻印解題している。第十九冊では、前冊に引き続いて吉川本未刊曲「雪頼朝」から「和歌吹上」まで五曲(吉川本完)、田安本未刊曲「愛寿」から「時雨」まで三十一曲、計三十六曲を、第二十冊では田安本未刊曲「信濃杜若」から「行家」までの二十九曲(田安本完)と法政能研究政本から「かばざくら」「獨體尼」の計三十一曲を収める。未刊曲の数は莫大のものであり、まだまだ続刊の筈。

『日本芸能各論』(折口信夫著。中央公論社、五三九頁、二月) 折口信夫全集ノート編第六巻で、所収論考の全篇が何らかの形で能・狂言と関連を持つ。中でも「謡曲物語」の章は、高砂・屋島・清経など全八曲の現代語訳を試みている。謡本の役付にはとらわれないで、内容本位の訳といえるもので、折口氏の主張の一端を見ることが出来る。他に「歌舞伎芝居の発生」「家元発生の民俗的意義」「祭り」「芸能伝承の話」「神道芸能の話」「俄狂言台本川の殿」その他。

『花伝書(風姿花伝)』(川瀬一馬校注。講談社、文庫版二二〇頁、三月) 幅広い読者層を対象にしたもので、本文・脚注と全文の口語訳。川瀬氏にとって口語訳は、二度目の刊行(第一回はわんや書店)ということもあってか、かなり現代的な表現もあり、こなれた訳といえる。本文底本は、第五までを宝山寺藏金春本、第六

を観世宗家藏世阿弥自筆本、第七は松迺舎文庫本を採用。能芸論第一級の伝書がこうして手軽に読める文庫本として出版されることは喜ばしい。他の世阿弥伝書もこうした読みやすい形での発刊が望まれる。

『世阿弥と能の探求』(松田存著、新読書社、二四三頁、三月)

第一部能楽大成のころ、第二部作品の展望、の二部からなる。

第一部は世阿弥の伝記と伝書の解題を中心に構成され、第二部は能の作品(約二十曲)に関連する史蹟の探訪とその他の伝説などに関心を示している。作者考定基礎史料一覧表を付す。

『能—捨心の芸術』(桜間道雄著、朝日新聞社、三三八頁、五月)

芸論・自伝・随想の三部に分かれたるが、著者が長年にわたって追究してきた能芸観を披瀝した芸論(第一部)が中心をなす。

能は、再現写実手法を排し、「技術を基盤として様式を備えること」とが必要だが、ためには単に技術上の問題よりは、「捨心」の境地—それは能の入門であり、同時に極めて高度な境地である—を知らねばならぬとする。そして「捨心」について、氏の身近にいた先輩たちの芸風や修行階梯を通して追求する。しかも著者は、この境地を単に努力によって結実させ得るなどとは考えない。多くの逸話などを通じて、素質と良き師との出会い、そこに努力が加わって始めて実現させ得るものであることを説く。素質・努力・師、この三拍子がそろふことによって初めて、いわば能を知る境地に達せられるということは、遠く世阿弥の言にも見られることだし、後にみる五人の名手たちも等しく発言するところである。自伝、随想の部も、内容的には全く芸論の延長線上にある。これ

まで個人の芸談、芸話の数はかなりあるものの、本書はその個人的な文体と、歯に衣着せぬ表現とに特色があり、従前の芸談等とは趣を異にする。

『金沢の能楽』(梶井幸代・密田良二著、北国出版社、三四八頁、六月)

金沢地方を中心にした能の歴史を、前田家代々の能に対する関心の持ちようとその影響というかたちで叙述をすすめ、現代の状況にまでおよんでいる。加賀の地に金春の流れが目立った時代、加賀宝生の開初から興隆期、能の隆盛爛熟期から終末、維新以後と大まかに分け、能(または能役者)とその保護者とのかわり合い方を通時的に見、同時に金沢と京・江戸との交渉交流をみようとしている。金沢市立図書館加越能文庫の資料を縦横に駆使しての成果で、一地方の能の歴史にかぎっていえば、最も詳細に叙述された書物といつて良いだろう。未刊の資料も多く翻印紹介されている。

同じく地方の能の歴史を書いたものに、『安芸の国の能』(竹内善幸著、私家版コピー印刷)がある。安芸国の鎮めとして存在する厳島神社の神事能、安芸の大守毛利・浅野両氏と能との関係、この両面を史的にたどり、安芸地方の能芸史を叙述する。特に浅野氏の為政期を、藩主一人びとりの時代に区分しての調査に重点がおかれている。詳しい調査とその成果を私家版として公刊された努力は敬服に値する。

『能楽風土記』(飯田嘉一郎著、檜書店、三四四頁、六月)

「能楽の歴史地理的研究」という副題が示すように、「エリア」の宗教的方法、ユングの分析心理学的方法を利用し、

「歴史地理的観点から能楽」研究を試みた書。第一部作品研究、第二部能楽史研究、附篇および余録の三部になっているが、第一部が中心。高砂・賀茂など十曲をとり上げ、関連する史書・地誌など、日本はもとより中国の史籍文献を博引し、詳細な調査が特色といえる多角的な論考で、独特な見解が多い。例えば、『牧盛』は「古代少年英雄神話の型をふまえた」曲で、笛には「少年英雄の両性性に通じる」ものがあるという指摘や、『松風』では、同類説話を列挙した上で、本曲は「エロティックムーンの範疇に入る」という指摘などほんの一端である。が、読む者は、ともすると、氏の該博な知識と文献とをフォローするのがやっとなという有様にもなりかねない。といっても、論考中に引かれた文献の多くは、簡単に見ることもできず、氏の精査のおかげで知ったものも多い。続稿を用意されているというから、これも刊行されることを期待しておく。

『世阿弥』(北川忠彦著。中央公論社、新書版二〇三頁、七月)

世阿弥の生涯と業績とを叙述したのだが、新書という本の性格から、従来のこの種の本とは比較にならぬほど多くの人に読まれたものと思う。世阿弥や能に関し、知識にさほど恵まれなかった人びとに、読みやすい形と文章とで、多くの基本的な知識を与えた功績は野上豊一郎氏の岩波新書、増田正造氏の中公新書と並んで大きい。しかし、本書の真面目は、従来の世阿弥伝記研究が、主として能楽論書を中心にすえて書かれてきたのに対し、世阿弥の能の作品を中心に考察することによって、その芸術と思想を中世という時代のなかで位置づけた点にある。「世阿弥を通して能

を見るのではなく、能の流れの中に世阿弥をおいて考える」立場で一貫する本書は、世阿弥とその時代・世阿弥の作品・世阿弥の芸論、世阿弥の流れ、の四章に分かたれるが作品論の章に中心がある。能作の主流は観阿弥―宮増―観世小次郎という、元来物まねの傾向の強い大和猿楽の伝統を受けつぐ者たちであって、歌舞能中心の世阿弥は非主流作家であった。そういう基本的には歌舞能作者であった世阿弥の業績は、①脇能の性格を確立した、②修羅物夢幻能を創出した、③修羅物の亡霊・物狂の克服から女体の夢幻能を成立させた、の三点を軸に、④進夢幻能ともいべき独自の世界を創り出したところにあるとしている。先行芸能である延年の風流と脇能との対比から説きおこし、夢幻能成立におよぶ過程で、世阿弥とその作品とを相対的に把握し、位置づけており、世阿弥の時代を超えた優秀さが浮きほりにされ、またそれ故に時代に受けいれられなかったとする見方も説得力を持つ。平易な達意の文章で曲名の初出にふり仮名を施すなどゆきとどいている。

『大蔵狂言集の研究』(本文篇上)(池田広司・北原保雄著、表現社、

四三一頁、八月) 故笹野堅編『古本能狂言集』(写真複製版。原本は大蔵弥太郎氏現蔵)を三巻に分けて、頭注・傍漢字等を付けて翻印したもので、上篇には「脇狂言之類」(三十二曲)、「大名狂言類」(三十三曲)、「髯類山伏類」(二十七曲)の計九十二曲を所収。室町時代から江戸時代初期にかけての狂言の姿を知る上で、また当時の国語資料として貴重なものとして定評のあるテキストだが、今日では入手することは極めて困難だった。いまここで、正確に、しかも詳しい注が付けられて翻印刊行されたのはありが

たい。完結が待たれる。

『狂言六義の研究』(松本危松著。わんや書店、四五二頁、九月)
 狂言の台本検討を通じて、「近代劇的見地における狂言の価値」の考察を目的とする。近代演劇理論と古典劇狂言とを多岐にわたって照合しながら、その両者間のずれを確認したうえで、狂言を近代的な「演劇」と認める。著者は、近代演劇理論についての該博な知識をもって、一つ一つ対照しながら、あらゆる点で狂言を「演劇」なりと断じ、評価するが、その対比の仕方がやや機械的にすぎ、ために狂言が没歴史的存在と化し、かえって狂言そのものの特質を見失ってしまいそうにもなる。「未解決な原論的課題に」取り組んだものであるだけに惜まれる。

『能謡新考―世阿弥に照らす―』(香西精著。楡書店、四二六頁、十月)
 香西氏の前著が世阿弥芸術論に追ることを旨としたものであるのに対し、能の作品研究に中心を置いて一書にしたもの。I世阿弥に照らす・II作者と本説・III作品研究・IV座談会「世阿弥の能」・V能と茶・書・禅という構成で、I)IIIとIV座談会(出席者、表章・観世寿夫・観世元雅・香西精・小西甚一・斎藤太郎・楡常太郎・横道萬里雄)とが主として作品研究、Vは能とその周辺の中世文化全般に目を広げたものである。所収論考の一つ一つは定評のあるもので、多言はしないが、香西氏の論考を読んでいつも感じさせられるのは、優れた直観力と手堅い実証性との見事な統一ということだ。実証と直観、実証に支えられた直観、直観を実証する学識、どんな研究者にも要求されることだが、それがいともたやすく実現されているのが、本書所収の論考の一つ一つであ

るといえよう。こうした方法による、手堅いそして独創的で新見にみちた論考が、実に平易な文体で書かれていることもまた大きな特色である。対象を研究者だけに限定せず、能や世阿弥に関心をいだくどのような人にも読んでもらおうとする著者の姿勢のあらわれであろう。第I章に収められる、ほとんど三十数年も以前に書かれた論考でも、その文体、内容ともに新鮮さを失っていないのは、すでに今日の方法と姿勢とをその時点以前で確立し、実行していたからであろう。本書は、その意味では、方法論研究書としても読み得るといえよう。

『狂言集』(北川忠彦・安田章校注。小学館、五九三頁、十月)
 日本古典文学全集の一冊、茂山千五郎家の現行台本を底本とし、頭注を付す。茂山家の特色の出ている曲二十五曲、大藏流の未翻印曲十五曲の計四十曲を選んでいるが、これで大藏流の現行曲はほとんど翻印されたことになるという。本文理解に資すると共に「中世の芸能、狂言がどのような姿で現在に伝わっているかを明らかに」めようとした頭注は、詳細かつ具体的であり、それ自体もすぐれて楽しい読み物となっている。同時に本文中へ挿入された写真も多く、狂言姿や舞台上の位置など理解しやすい。巻末の狂言名作解題も簡略ながら要を得ている。

『芝罎狂遺話』(佐野巖著。わんや書店、三八一頁、十一月)
 名文家として名高かった佐野氏の遺稿集。さざれ会会報や雑誌「宝生」に所載のものと、一部未発表分とを集成。謡技術に関する芸談。

『能と狂言の世界―対談五人の人間国宝にきく―』(横道萬里雄

編。平凡社、二九六頁、十一月)

今日の能界の第一人者である五氏が、それぞれ聞き手を異にして思いきり語ったもの。五人の人間国宝とそれぞれの聞き手は次の通り。

近藤乾三——金井 章 表 章

幸 祥光——観世寿夫 横道萬里雄

柿本豊次——横道萬里雄

野村万蔵——野村万之丞・万作 飯沢 匡

松本謙三——山崎有一郎

話す側も聞き手ともに今さら紹介の要のない方ばかり。第一線に活躍中の方々である。聞き手に人を得た五人の名手は、まず能・狂言および師匠との出会いから始まって、稽古修行の時代をふり返り、その間に接し得た名人上手の芸風や逸話を織りこみながら、自らの芸の出発点から今日に到るまでを語る。そこには、名手たちの能芸観や、能・狂言に対する深い愛情と現状に対する敵しい認識とをはっきりと見ることが出来る。今は亡き師匠を敬慕してやまない名手たちは、師説を遵守することにかけては人後に落ちず、その上に自らの努力と修練とによる工夫を重ねて今日の芸境に達した、とする点で全く一致する。しかし、そこから出てくる伝統継承の問題となると、根本的には異ならないまでも、微妙なところで相違をみせることもある。流動する時代と社会の中で、伝えてゆくべきものの、変化に重きをおくか、不易に重きをおくか、一人びとりの能芸観・伝統芸能観の相違が根本にあって、発言が微妙に違ってくる。時の変移と、そこに位置づけねばなら

ぬ能とを見つめる大家たちの目は、冷徹そのものといって良い。その視点から現在の能界をみる時、おのづから敵しいものとなり、後進への率直な批判となってくるが、同時に、生活に迫られざるを得ない今日の若手たちのおかれた現実にも目を向けており、後継者養成問題のむつかしさにも思いをいたしている。この名手たちの語る履歴はもちろん逸話や裏話も、きわめて率直具体的で楽しく、そのままが近代能楽史の重要な部分となるだろう。今やこの人たちと同代の長老の記憶によらねばそのまま埋れてしまうことも多々あるはずである。この対談集は、そういう意味で一つの史料・証言の書としても貴重な位置を占めよう。同様な企画がさらに実現することを切望しておきたい。

『THE NOH volume one God Noh』(C. Shimazaki, 島崎千富美訳。楡書店、三三二頁、十一月)

高砂、老松・養老・賀茂・絵馬・西王母の英訳と英文解説。以下続刊という。

『趣味の謡曲』(久保博著。私家版、一六九頁、十二月)

「大衆芸能発達史・九州風土記」と副題がある。九州地方の能謡曲について幅広く調査しようとしたもの。

なお、47年中に複製、複刊された主なものは次の通り。いずれも待望久しいものであった。

『能楽史料 第五輯 隣忠秘抄外篇』 (わんや書店 三月)

『同 右 第一輯 御世話筋秘曲』 (わんや書店 四月)

『同 右 第四輯 隣忠秘抄』 (わんや書店 四月)

『坂元雪鳥能評全集 上・下』 (豊島書房 五月)

〔雜誌論文、その他〕

伊藤正義氏「謡曲高砂雜考」(文林六号、三月)。謡曲「高砂」について、ワキ友成を阿蘇神職惟人の末流とする『謡曲拾葉抄』の説を機縁として、「高砂」と中世流布の古今集注との關係を追求し、さらに『謡曲拾葉抄』の著者犬井貞恕の注釈の方法・態度について述べたものである。「高砂」の問答・掛ヶ合の部分で、相生の意味を解明し、伝授事ともいふべき内容の語られるところに、古今集古注『三流抄』の投影を見、「高砂」が古今仮名序を点綴させるのも、その根底には「古今集の中世的理解」があった。世阿弥は古今注から構想を得て一曲を構成し、その眼目は「古今仮名序をめぐって形成されている中世的理解—古今集の深義を、高砂の松の木蔭に実証し、その奥義を、舞台上、立体的に示すところに」あった。そしてその骨子たる「歌学の秘密を語り得るのはまさに歌神としての住吉の神で」、それは白髪のお翁として出現するのが常だから、「高砂」の後シテは元来老体の神であったろう。世阿弥時代の演出は現行のそれと異なるだろう。作者世阿弥は、「高砂」を、ひれがあるると自省するが、直に下る点を犠牲にしても、「良き能」の条件たる面白き能を意図し実現したことは、世阿弥の代表作として評価できる、とする。

これまで、古今集序の俗解にしたがい、あるいは伝説をもとに構想されたと考えられていた「高砂」が、『三流抄』という中世に「流布と影響力の大ききとによって極めて注目される」書物によっており、中世歌学における普遍的理解にもとづくものであつ

たことを論証する。「高砂」の語りかける松寿千年、僧老同穴のめでたさを、「そのように作りなした作者の手腕であるが、眼目はまさに「古今集の深義」の実現であった、という指摘は新鮮であり、卓見だと思ふ。伊藤氏には、本稿と同系列の論考がいくつかあるが、そのいずれもが新見を提示しており、本稿で、世阿弥の作品構想の根底にあるものを明らかにした事と共に功は大きい。続稿を大いに期待したい。

ところで、伊藤氏の本稿および一連の成果は、「およそ古典の解釈という場合、語彙と語史、語法、文学史あるいは文学の背景としての歴史的事実、それらをふまえて、現代のわれわれの古典の理解がある。しかるに、それと同質のものが、中世の場合にもあると考へて来た無意識の前提があったのではなからうか」という反省のもとに生まれたものだといふ。氏のこの言葉を、私はこの論考の提示された新見と共に大切にしておきたい。

なお本論考では、『謡曲拾葉抄』の著者犬井貞恕の「中世的伝統をふまえる歌学的教養」に支えられた、謡曲注釈の適確さについてふれられているが、氏には、いわば埋れた謡曲研究家ともいふべき香亭中根淑の伝記と謡曲解釈の方法・態度を論じた「中根香亭と『謡文評釈』」(谷山茂教授退職記念国語国文論集、稿書房、十二月)がある。

小西甚一氏「作品研究源氏供養」(観世・四月)、徳江元正氏「作品研究松山鏡」(同十一月)も、それぞれ示唆に富んでいる。小西氏は、曲舞と關係のつけようのない紫式部をシテとして、舞グセを含むという「源氏供養」の構成の特殊性に着目し、「本曲のクセ

が表白にもとづく」もので、しかも「表白を曲舞と同様にひとつの芸能として扱って」いることを論ずる。「源氏供養」のクセ前後が『源氏物語表白』を下敷にしていることはすでに指摘されていたが、表白を曲舞と同じような芸能として扱ったものだろうという着想はなかった。表白が特殊な読物であるだけに可能性は高い。紙幅の関係で、論証がやや大まかになっているのだが、興味あるご指摘であった。徳江氏は、「松山鏡」を機縁に狂言その他芸能全般に目をむけ、さらに能への脚色以前の民俗に関心を寄せられておられる。鏡を媒介に後シテ登場についてふれ、「鏡を小道具として扱う宗教芸能者のなりわいを想起」といわれ、興味深いご指摘ではあるが、具体的にはそれ以上の追求をしておらず残念である。

雑誌「観世」では、隔月に作品研究を掲載し、同時に演者をもふくむ座談会や鑑賞講座なども掲載し、作品の総合研究へ関心を示しているが、四七年は、前述の小西・徳江両氏のほか、片桐登「楠露」(五月)、金井清光氏「楊貴妃」(七月)、宗政五十緒氏「通小町」(九月)がある。

八嶋正治氏「世阿弥における『姨捨』の位置」(能楽思潮58、59、三月)は、世阿弥における「老」の意味を、三老女、特に「姨捨」を中心に見たもの。世阿弥伝書中の作品論的部分と作品とをつき合わせ対照しながら、特に申楽談儀の中に出てくる作品を徹底的に検討したうえで、「姨捨」を「井筒」と比較し、結局、「姨捨」は、立舞としてクセとワカ、序之舞を持つ曲である「女体雑芸」の発展途上にあつて『萎れ』という美的側面を導入して作ら

れた能」であり、「姨捨」の老は「極められた老ではなく、写実と美を兼ねた老で」ある。しかも、萎れは「世阿弥の様式に対する自覚を最も早い時期に於て示したものだから、「この老は、老を老として表現する、現行の『姨捨』とは別の性格を持つものである、とする。結局「姨捨」は応永三十年前後に「当然現われて然るべき」能であり、「井筒」へ向う最も近い位置にある曲としていたのである。世阿弥伝書の所論と作品とを一つ一つ具体的かつ詳細に照合しながら、主として演技的側面と作品の様式的展開とに重点を置いて検証を試みる。八嶋氏が従来から試みる方法であり、この論では申楽談儀を中心に音曲論にもふれるなど総合的に接近しようとするのは、必要かつ有効な手段であろう。「姨捨」に萎れを関連づけたことでは、松本孝造氏「萎れたる花」(観世、三月)との類似性が見られて興味をひく。松本氏の論考は、花伝第三の萎れたるの論を追求したもので、世阿弥のこの理念は、兼好の徒然草一三七段の意識に通うとし、「世阿弥のいう『萎れ』とは、老女の能にかかわる風情が、その最たる発露ではなかったか」、しかもこの点からみて、世阿弥が老女の能を模範曲と評価する意識は、かなり早いころに定まっていたのではないかとしておられる。松本氏には「世阿弥と衆人愛敬」(国語国文、九月)もあるが、いつもながらの手堅い論考で、啓発されるところが多い。

八嶋氏には、「世阿弥後半生の演技論と作品論の関係」(文芸と批評三一、八月)、「世阿弥の構成論・作詞論から見た『野宮』『定家』」(能—研究と評論I、十二月)があり、共に前記論考と同

系列の労作である。氏の論考は、前述のように必要かつ有効なものと思うのだが、ややもすると、独特な文体や概念のやや不分明な用語の使用、あるいはあまりにももりだくさんな内容などによって、主題が不鮮明になり、読者の理解をさまたげる恐れがないでもない。せっかくの労作でもあり、いくらかの配慮がほしいように思う。

田田和夫氏「驚流狂言『はんせん(飯銭)』の形成とその意味」(静岡英和女学院短大紀要第四号、三月)。家康の命によって、驚仁右衛門宗玄の作った「飯銭」は、その形成時には新鮮味を持った内容と意識されたが、狂言の固定化がすすむにつれて、評価が低くなった。それは、江戸初期驚流の芸態を示すともいえる、シヨ一的な要素を持つ狂言が受け入れられなくなったからであり、「飯銭」は江戸初期の狂言が、まだ狂言らしい流動をしている時に咲かせた仇花であった、という。たしかに、作者仁右衛門宗玄は、「八十七ニテ、七本松ノ勸進能ニ、飛ンヅハネツ、柱ニ上リ」、家光の前で「舞台ヨリ下ニヲリ、竹馬ニノリア」(四座役者目録)るき、不興を受けたような人物で、しかも伝統ある大藏をおしのけて、驚流を狂言筆頭の家柄にまでたかめえたというのは、能の北七太夫を思わせるものがあり、面白い。流動と固定、室町末期から江戸初期にかけての具体的な考察として評価しておきたい。同じく田口氏の「狂言『くさびら』と景徳伝灯録との間」(能楽思潮5859、三月)も面白く読めた。「くさびら」の作者を仏教説話の管理者であったらうと想定するが、興味ある指摘だ。さらに同類のものがあるかどうか、追求が期待される。

説話といえ、堀口康生氏「謡曲にみる語り手の面影」(芸能史研究36、一月)は、「説話世界を視覚化したとみられる能」のなかに、説話の語り手の姿は投影していかないか、と問題を設定し、通小町・長柄・舟橋・錦木・女郎花・古曲雲林院の和歌説話と密接につながる六曲について、成立・曲の拠った説話、各曲の共通点の持つ意味などを検討したもの。短い論考でもあり、結論を出すまでにいたっていないが、説話を単なる素材として扱うのではなく、謡曲を説話の系譜の中において考えようとする注目すべき視点といえるだろう。

流動と固定という点では、北川忠彦氏の「狂言『花子』の歌謡」(山辺道十七号、三月)がある。虎明本「花子」は、虎寛本以降のものにくらべ歌謡の数が多く、しかもさしかえ用のものをも用意していたことからみて、「花子」の歌謡は、狂言歌謡の中では最後まで流動をつづけ、定着の最も遅れたものだろう、という。これまでの考察によると、「花子」の歌謡も、他の多くの歌謡と同様に古い伝来のものと考えられてきたが、北川氏の考証によって、その再検討を迫られることになった。各流派の「花子」の歌謡を「一つ一つ点検しておく必要」がありそうだ。

もう一つ、山路興造氏の「手猿楽狂言と初期かぶき狂言」(芸能史研究39、十月)は、副題に「若衆狂言師の系譜」とあるように、室町時代後期(文明年間以後)の手猿楽狂言中に若衆狂言師の存在を認め、それらの芸脈が、若衆かぶきにおける基礎的芸の一つとして伝流していたことを述べようとする。論考の前半は、能・狂言の研究でも、対象とされることの比較的少ない手猿楽の、し

かも狂言役者を正面からとりあげ、埋もれているにしても、決して多くないことが予測される手猿楽狂言の資料を実にたんねんに博搜し、文明年間から文禄・慶長という変動期の手猿楽狂言の実態を明らかにするに至っている。資料を挙げてくれただけでも役に立つが、資料を活用しながら手がたい論をすすめていることに、いつもながら敬意を表したい。

狂言関係を一括しておけば、宮崎紋子氏の労作「山口に残存する鷺流狂言(一)(二)(三)〔宝生、四・五・七月〕は山口毛利氏お抱え狂言師および明治以後の山口の鷺流を中心に資料を博搜している。

橋本朝生氏「木六駄の展開」〔狂言研究、五月〕、「公家人疲勞事」の狂言をめぐって〔能一研究と評論1、十二月〕があり、後者は成立期狂言の抵抗の芸能としての再認識の必要性を説く。

雑誌「能一研究と評論」が創刊され、所収論考のいくつかはすでにみたが、ここで一括しておくことにしたい。

松本雍氏「『布留』の作者について」、西野春雄氏「『松尾』演出史雑考(上)」、遠藤由宇子氏「クルとシオルから」の三篇は、能の技法に関する知識を導入した作品研究または、技法そのものに関するエッセイである。松本氏には「能における神楽の研究」(芸能の科学3所収、三月)があつて、神楽に関する総合的研究を試みており、同じ方法によって成果をあげているが、ここでも、その神楽の論をふまえて、「布留」は観阿弥作ではないかとの説を提唱している。西野氏の論考は未完であるが、同じく新しい方法による作品研究の成果の片鱗を見せている。なお「能一研究と評論」には能評論ともいふべき二篇がある(西哲生、羽田和氏)。

次に資料の紹介・解題を主とする文献のうち重要と思われるもの二、三について略記しておきたい。

伊藤正義氏「金刀比羅宮蔵本『江口』二卷」(ことひら新春号)は、明らかに室町期筆の観世流謄本で、宗節・元頼両系統以外の、より古型を存すると思われるものの、忠実な翻印・紹介で、注が付けられている。

小山弘志氏「明暦堺七堂狂言芝居(翻刻・影印)」は、大藏弥右衛門虎明の記したもので、承応四年、和泉の堺七堂の浜において、虎明・虎栄父子の催した勸進狂言の記録紹介である。山本東次郎氏の所蔵で、昭和二十六年五月、春日順治氏によって「桐朋女子学園紀要第一集」に翻印紹介されたことがあるものを、再び翻刻すると共に、影印をも付けられている。春日氏の翻刻本がほとんど入手不可能になっていただけにありがたい。小山氏の翻刻は原本にとらわれず、表記を改めたり、濁点をつけたりして、読み易さを旨としている。東京大学教養学部「人文科学科紀要」第55輯、国文学・漢文学編(五月)所収。

「観世宗家所蔵文書目録」(観世、四月・十一月)は、法政大学能楽研究所の創立二十周年記念行事の一つとして調査を進めている、観世宗家蔵能楽関係文書の目録。表章氏の文献資料に対する該博な知識を動員した執筆で、その詳細な記述は、単なる解題の域を超え、個々の文書を通して能楽史の一端に迫ることになる。長期の連載になる予定だが、四十七年は四月・六月が世阿弥自筆本、七・十一月が世阿弥伝書関係文書、そして十一月には室町期諸文書(謄本は除く)にもふれている。

中村保雄氏『『使用謡』について』(芸能史研究38、七月)は、江戸時代中頃に成立した『使用謡』(謡曲型式に作詞し、節付も施して、日常一般に必要な事項を暗記しやすくした謡)の内容や謡本の歴史上での位置などを解説した上で、享保八年刊の三浦久之丞庚妥板を底本とし、躰の端・竹弄・七十二候・秋津国・九重などの全十五曲を翻印紹介したものである。

最後に、演能団体で刊行するパンフレットや隔月刊等の小誌に掲載されたものの、注意すべき若干にふれておきたい。

雑誌「梅若」に五年にわたって連載された、古川久氏編「初代梅若実年譜稿」が完結した。明治の偉大な役者、初代梅若実は克明な日記を残しているが、編者はその全部に目を通し、梅若実自身に関係する重要事項、たとえば大曲の抜きはいうまでもないが、一年一年の入門者の数などまでピックアップし書き出してくれた。梅若実とその周辺の人々の活躍ぶりを知るうえで、従来の説を訂したのも多く、新事実もいくつか判明した。編者もいわれるように、この上は日記の全文が紹介され、梅若実の生涯と明治期能楽史とを具体的に、より詳細に知りたいものだと思う。公開を願っておきたい。

従来から知られているようで余り知るところのなかった謡初について、おもてあきら氏が「鉄仙」紙上に論考を寄せた(謡初雑考一〇四)一月(四月)。徳川家と謡初の関係や、江戸幕府における謡初の式の変遷、それにからまる四座一流の流勢の変動、室町期の謡初の形式と歴史などを記述する。後には將軍家の独占となる謡初も、室町期には、本願寺でも行っており、有力大名家で

も演じていた可能性があるという指摘もされている。小篇ながら読みごたえがある。おもて氏は、「鉄仙」六月号からは「鉄之丞家の代々」を連載しており、鉄之丞家初代清尚(六月(八月)・二代清興(十一月、未完))について詳細にふれる。ごく大まかではあったが、以上で四十七年の展望を終わり、次に同年中に刊行された古記録の類で、能芸史研究に役立つと思われるものを列挙(刊行順)しておくことにする。

- 『新訂言継卿記 第二』 天文十一年正月
増補言継卿記 第二 天文十八年十二月
- 史料纂集『師守記 第五』 貞和五年四月
延文元年三月
- 同 右『山科家礼記 第四』 文明十三年正月
長享三年三月
- 大日本古記録『建内記 五』 嘉吉元年十二月
嘉吉三年三月
- 史料纂集『北野社家日記 第一』 宝徳元年十月
延徳元年十二月
- 『新訂言継卿記 第七』 紙背文書
- 史料纂集『北野社家日記 第二』 延徳三年正月
同 三年四月
- 同 右『師守記 第六』 貞治元年十月
同 二年十二月
- 同 右『十輪院内府記』 文明九年正月
長享二年二月
- 同 右『北野社家日記 第三』 延徳三年五月
明応元年十二月

なお、光悦の謡本の複製刊行として『実盛・熊野・猩々』(表章解題、日本古典文学刊行会、四月)があり、特殊な文献として、『江島伊兵衛氏記念帖』(江島伊兵衛氏の略歴・主要著述目録。法政大学能楽研究所編)のあることを附記しておく。 八片桐 登